

中学校社会科における 生徒の主体性を育むための授業開発

－ 生徒の社会認識のための問いと市民社会科としての問いに着目して －

学籍番号 209317

氏名 北村 奈三

主指導教員 松永 尚子

副指導教員 手取 義宏

1. 問題意識

筆者はこれまでの実習での経験から、教師が一方向的に問いを発する授業ではなく、生徒と共に授業の意味や価値をつくり出すにはどうしたらいいのかという問題意識を抱くようになった。そのためには、生徒が学習からどのような問いをもったのかを教師は捉えることが重要であると考え。では、どのようにすれば、生徒の学びたいことも教師が学んでほしいこともどちらも授業に取り入れ、教師と生徒が共に意味や価値をつくることができるのか。本研究はこれらの問題意識を原点としている。この問いについて筆者が実際に実践と振り返りをする中で、新たな社会科授業開発の示唆となり得るだろう。

2. 研究主題

平成 29 年に学習指導要領が公布され、社会問題を主体的に解決することが求められている。また、変化の著しい現代社会において、与えられた課題を解決しようとするだけでなく、生徒自らが社会事象から課題を発見し、追究する主体性が求められている。このような社会科における主体性と生徒の問いの関係性から、社会科における生徒の問いに関する研究が求められ、生徒の問いに着目した社会科研究が近年増加している。これまでに、生徒の問いに着目した社会科授業の研究は存在しているが、吉川、近藤は現代の視点から生徒の問いを捉え直す必要性を求めている。このような社会問題を主体的に解決するために生徒の問いを現代の視点から捉えなおすといった社会的欲求に応えるには、正統的周辺参加論といった視点から生徒の問いを捉え直すアプローチが適切ではないだろうか。佐長は、現代社会の問題の解決に貢献するために、新しい学習論として正統的周辺参加論を採用し、現実社会と結んで社会変革へと向かう学習を求めている。正統的周辺参加論は、学習を共同体で行うものとして捉えており、その共同体は実体的なものではなく、目的を共有して実践する参加者が結ぶ関係としている。このことから、社会科の授業で生徒が、これからどのように社会を形成すべきなのかといった問い立てることは、学校を超えて、同様の問いをもつ市民社会の共同体に正統的周辺参加し、主体的に社会を形成していくこと

につながると考える。では、どのような社会科授業の文脈でどのような問いを生成することが主体的な市民社会への正統的周辺参加となるのだろうか。

3. 研究の方法

本研究では、大きく4つの段階で研究を行った。まず、第一は、正統的周辺参加論から生徒の問いを捉えなおし、先行研究の分析から市民社会科としての問いが生成された社会科研究がまだないことを第一章で示す。第二は、正統的周辺参加論から社会科授業の文脈と生徒の問の関連性を歴史的分野の実践を通して第二章で明らかにする。第三は、どのような社会科授業の文脈が市民社会科としての問いを生成するのかを地理的分野の実践を通して第三章で明らかにする。第四は、生徒のインタビューから生徒の問いを正統的周辺参加論から捉え直すと共に、第三章の実践から具体的に市民社会科としての問いを生徒に生成させる社会科授業の提案を第四章で行う。

なお、本研究では正統的周辺参加論を援用したアプローチを研究手法として用い、生徒の問いは状況に埋め込まれていると考える。そのため、本研究では実習校における生徒がどのような社会科授業の文脈でどのような問いを生成するのかを分析することは重要である。そして、学校外の市民社会の民主的な共同体に参加し、主体的に社会問題を解決しようとする問いはどのような問いなのかを解明することが社会科で求められる市民性の育成にも関係すると考える。そのため、正統的周辺参加論をアプローチとして援用し、社会科授業の文脈と生徒の問の関係を解明し、民主的な市民社会への正統的周辺参加となる問いがどのような文脈で生まれ、その問いはどのような問いなのかを見出すことができる。

4. 本研究の意義と特質

以上より、本研究の意義と特質は以下の3点にまとめられる。

第一は、正統的周辺参加論の視点から社会科授業における生徒の問いを捉え直すことである。近藤は、生徒の問いを、「子供自らが意味を構成し、創出するもの」として捉えており、大島は、問いを立てる行為自体が主体的に答えを探る行動に繋がるといった意味で主体性がある行為だと捉えている。これらに加え、筆者は、生徒の問いを、学校共同体へ参加する問いと市民社会の共同体へ参加する問いといった、より民主的な市民社会への正統的周辺参加を視野に入れて捉え直す。

第二は、社会科授業の文脈と生徒の問の関連性を解明することである。近藤と大島の実践研究の分析から、一元論の社会科の文脈では社会問題を解決しようとする市民社会科としての問いが生成され、二元論の社会科の文脈では事象を科学的に説明しようとする社会認識のための問いが生成されると考える。そのため、第二章で歴史分野の実践と質問紙アンケートを用いて解明する。

第三は、生徒に市民社会科としての問いを生成させるためには、どのような社会科授業の文脈づくりが必要なのかを提案する。

これら本研究の意義と特質は、社会科授業における生徒の問いについての新しい側面に光を当てることができるだろう。